

話にならない人もいました。

戦後は帝都防衛でしたので、航空機の兵器などを取り外したりし、兵隊は早く帰った。また、連合軍は特攻機を警戒していたため、航空隊は早く帰されたとも聞いております。家の方は大丈夫でしたので一年は農業をし、県警に入つたのですが二年で辞めてしまいましたので公務員の資格は無いのです。

当初はサイパンかニューギニアというのが、硫黄島、トラック、サイパン、硫黄島と航空隊勤務となりましたが、全部が玉砕地でした。航空整備ということで玉砕を免れ、本土防衛で千葉県の茂原、香取と勤務しました。我々が整備した航空機の搭乗将兵で戦没者は多数でした。また、クエゼリン、南洋群島、硫黄島の防備隊のほとんどは玉砕しています。陸、海軍人ばかりでなく民間人も多数死にました。島嶼での生活も戦務も、大陸や大きな島でのそれとは異なつて、常に孤独な日々の連続でありました。私は五十何年前のことを思い、今日ある幸いを強く感じております。一度ならず死を覚悟したことのある私ですから。

ビルマ野戦航空分廠

苦難の家族を想う

岐阜県 澤田賢三

私は現在の岐阜県関市吾妻町という所で盲目の両親のもとで大正十一年九月三日、長男として出生しました。父は若いときに学生がさしていた傘の骨が眼に刺さり両方共に眼球をなくしてしまつたといひます。母は農家で生まれ養蚕など手伝いをしていたのでしようが、当時の農家の子供は、今では考えられないようなことですが、栄養も取らず働き続けたようので、栄養失調のため失明したと聞いています。

大正十四年の十月ころ、私が満三歳のとき、岐阜市春日町へ出て借家住まい、父はマッサージで生計を立て、母は盲目でしたから、私が父の杖代わりとなつて、あちこちへ付いて回りました。私は妹、弟の長兄ですので、家庭のことをやりながら高等小学校卒業まで家

にいました。父は心臓も悪くなり生活は苦しかったのです。小・高等小学校八年（尋常小学六年・高等小学校二年）の間に四回も転居、転校をしました。

友人ができて、仲良くなったころには転校しました。岐阜県揖斐郡池田町温知小学校で六年の小学校を卒業し、また岐阜市の本郷高等小学校で高等科の二年の卒業ということですが、今でも忘れることができないのは、その卒業修学旅行のことです。費用は五円でしたが、父は体の具合が悪く働けず、私一人が行けなかったのです。そのとき、温情のある先生が五円を出してくださって卒業の修学旅行に連れていってくれました。

昭和十五年十一月、父は突然、昼から頭が痛いといつてその日のうちに寝たのですが、母が気が付いたらもう水も飲めずに死んでいきました。翌十六年十月ころ、今度は母が脳卒中で二カ月半の意識不明となり、ようやく気がついたら、半身不随、手足も動かさなくなり、妹が母の面倒や家事をしていましたので尋常小学校卒のみ、弟は高等小学校を卒業ということ

でした。

私は高等小学校卒業後、鉄工場に勤め、三回ぐらい転属しましたが、高岡鉄工場という軍需品作製の会社で、女工員が二十人ぐらいいて、その監督のような仕事をしていました。徴兵検査は昭和十七年七月二十一日で、その日は記録に残る暑い日でした。

私は十七年後期の現役兵ですが、検査が済んでから一年二カ月も入営しなかったのです。昭和十八年七月いっぱい家にいたのですが、そのころ寝汗をかいていたので医者診断では肺浸潤の気があるとのこと、投薬一カ月の養生をし、九月に入営となりました。

その間、幸にも弟も高等小学校卒業、妹は家にいて母の面倒を看ながら家事をしてくれました。母は盲目、歩行困難、左手不自由でお茶碗も持てない。私は心残りでしたが、母は「お国のためだから」と言ってくれました。そのため盲人の家からの入営ということで、当時の盲人協会から感謝状をもらいました。

入営は昭和十八年九月一日、九州太刀洗の第五航空教育隊でした。そのとき、岐阜からは二、三人入営し

たと記憶しています。その部隊に入営した者が多く、全国から集まった初年兵は二〇〇―一三〇人ぐらいいはなかつたでしょうか、私は第六中隊、内務班には同郷岐阜県の人が一人いました。

教育は一般の兵科も一週間に二回ぐらいいやるのですが、その他は主に航空写真機の修理の教育です。第五班だけが特殊技術の教育で、鏝（やすり）の使い方から教育を受けます。私は鉄工場で既に修得していて、内務班でも技術は右翼（上位）でしたし、班長の受けも良く、下士官当番でした。

そのため厠（便所）当番や食事当番もやらずに恵まれました。これがかえって古参兵の意地悪というか、私的制裁には随分あいました。「急降下爆撃」というのは、足の爪先を整頓棚に載せて頭は下に下げる。そのため頭に血が下がって、五分もしたら目眩みがある。連帯責任で戦友と対抗ピントをやらされる。戦友の頬をこちらが打つ、戦友が私の頬を打つ、戦友同志だから手加減すると、古いのや先輩が「こうやるのだ」と、力一杯叩かれるのである。古参兵は案外やらぬが、半

年前に教育を受けた前期の者から消灯後やられました。私的制裁に対しては部隊長はやかましかったし、中隊長も温和で、禁止になっているのですが、陰ではやられたのです（将校は営外居住で、週番士官しかいない）。我々は航空教育隊でしたが航空兵ではなく、二月下旬までこのような教育を受けました。

昭和十九年二月二十二日、三日に野戦へ行くために営門を出しましたが、どこへ行くのか分からない。しかし、夏服を着せられたので南方だと思っていました。三月八日ころ門司出港でした。その間は旅館に泊まり、近くの練兵場で軍事教育を受けましたが、それ以外は一步も外へは出られませんでした。

輸送船はタンカーでした。軍人、軍属合わせて五百人くらい、甲板には戦闘機十機載せてありました。三菱の二三ノットの高速タンカー（南方から油を積んで帰る船）ですから直ぐ台湾高雄港に着きました。私たちはもちろん、引率者も確実な行く先は分からない。台湾沖で魚雷二発の攻撃を受けましたが、高速船だったので左方へ旋回し、魚雷は舵の数メートル先を通っ

ていつて、難を逃れることができませんでした。

三月十八日(十日間で)シンガポール入港・上陸、随分早かった。三隻の船団で、シンガポールまでは二隻に対し駆逐艦一隻が絶えず護衛していたのは、戦闘機十機積んでいたからです。兵隊より飛行機の方が大事だったからでしょうか。南兵站到二十日間ぐらいでしたが、その間空襲もなく訓練もなかった。昭南市の街を引率外出しながら運動をした程度で、そのときの我々の隊は三三人でした。

ジョホール水道を渡って、列車でマレー半島縦断、泰のバンコックへ着いたのですが、その間列車では寝られず、空襲を避けるため野宿をしました。早朝出て昼ごろまで走るとか、バラバラと発車、燃料は薪、その火の粉で無蓋貨物列車が焼けたこともありました。ジャングルで野宿しているとマラリア蚊に刺されたのでしよう。それが原因で私は後になってマラリアに悩まされました。

バンコックの野戦航空修理廠に入るのには約二週間かかり、本廠で部隊編成終了、出発命令までは約二週

間ぐらいかかりました。ビルマのインセンにある第三分廠に派遣となったのです。そこはラングーン北方二十、三十キロにあるのです。泰緬鉄道でラングーンまで行つたが、その間、夜は野宿です。天幕もなく蚊帳もないから防蚊頭巾というか、円筒型の蚊帳を頭から被る。有蓋貨車に三三人が装具と共に乗るのだから寝ることができない。横にもなれないので苦しいから、停車すれば外へ出て、足を伸ばしたり運動をする。体が痛くて仕方がない。

何日かかったか記憶が薄れていますが、十日間ぐらいでラングーンに着いたのではなかったでしょうか、泰緬鉄道の線路が爆破されたり空襲があるので、野営、ジャングルへの退避の連続でしたから日数がかかったのは当然でしょう。

インセン部落にある大学校校舎が第三分廠の兵舎でした。分廠は軍人・軍属併せて約三百人で一個大隊くらい、隊長は少佐、二個中隊、そこには鉄工場二カ所、発動機工場、部品工場、ゴム工場、自動車工場、兵器工場があります。電精機工場には飛行機の計器・点火

器・写真器などがありました。

私は写真の担当で、撮影・現像・焼付けをして、これを部隊へ出し、さらに飛行師団司令部へ持って行って飛行機の故障、被弾個所を写真を資料として処置をしているのです。そこは加藤隼戦闘隊長のいた部隊でした。

インセンに着いたとき、私は既にマラリヤや Dengue 熱にかかっていて入退室を三、四回繰り返していました。最高四一・二度出たのですから忘れることはできません。発熱の次は悪寒で、毛布を何枚掛けても寒さと震えは押さえることができない。その後六、七カ月で黄疸になり入室、それが原因で肝臓をやられ苦しかったのです。

食事はお粥茶碗一杯に梅干二個で二食、他の副食は何もなし、私の軍隊生活では一番苦しかったのです。

そのとき、班長が病室まで来て「貴様たるんでいる」と私的制裁のビンタを随分くれました。入室は一番成績に影響するのです。三十三人中十二番だったのですが、十七番の者が一選抜の上等兵となったので、やる

気を無くしたことも事実です。各工場ごとに一選抜上等兵になるため私は除外されたのです。しかし、電精工場の曹長は認めてくれたのですが、序列は内務班長の発言が強く、その班長に入室でケツチンを食い、結局は第三選抜上等兵ということになってしまいました。

私の任務は写真の撮影・現象ですが、自分には経験がなかったので修得するまでにはかなり難儀をしました。現象液・定着液は自分で調合する。写真は、ビルマ第六十四戦隊の隼（軍神・加藤健夫少将隊）。ビルマ方面の空襲や、敵機に立ち向かって戦闘したときや故障した飛行機を撮影するのです。空中戦のとき、事故を起こしたり、銃弾痕など、空中戦で翼、方向舵、胴に皺がよったり、故障を起こしたりするから、その飛行機の現物を修理前に撮影し、師団司令部に送るのが任務です。

自分の原隊からミンガロン飛行場まで自動車で送り迎えされる。その自動車は故加藤隼戦闘隊長愛用のシボレー車で、ボンコツ車ではあるが感激して乗車して行きました。現物を現場まで行って写すのが任務です。

しかし昭和十九年から二十年にかけて、第六十四戦隊には飛行機が十二機しかありませんでした。大部分の飛行機はフリーピン戦線に出て行ってしまつて、航空隊は何梯団かに分けて、タイ国境近くのウモンという所に仮宿舎を作り、第十九野戦航空修理第三分廠もそこにいました。そのころになるともう飛行機もなくなりましたが、つて修理する物もなくなつたのです。

話が前後するかもしれませんが、第三分廠での勤務中、工場が爆破されゴム工場が全焼したり、落下タンク（予備タンク）工場も焼けました。野戦でのタンクはベニア板でした。使い捨てです。出発時に燃料を積むが、ベニア板（戦闘機用）だから軽い。

昭和十九年末ころになると爆撃はひどく、空襲の度ごとにジャングルの中の防空壕に避難しました。盛り土の掩蓋壕で空から見えず助かり、戦友の戦死もなく病死が一人でただけでした。しかし、モールメン転進中に二人が銃撃で戦死しました。

昭和二十年二月から第一挺団がインセンから転進開始、私は第二挺団で三月上旬転進しました。機械・部

品・酸素ビンなどを貨車に積んであるので、空襲になると荷を降ろし、ジャングルの中へ分散させ、兵隊もジャングルの中へ避難する。貨車は貨物と別の所へ退避するのです。敵機は英軍機が多かつた。

そんな状況の中で撤退したので、銃撃を受けたり、ビルマ兵が反乱を起し我々の出先の兵站とか糧秣廠とかの兵器のない部隊が襲撃され、多くの犠牲が出ました。

私の所も、朝出発したから助かつたのですが、晩までいたら襲撃されたでしょう。我々は何しろ兵六人、銃三挺、弾薬三〇発しかないのでから襲われたら全滅したでしょう。

朝トラック一車両で出発し、兵三人が銃を持って見張りをしていました。その朝、英軍のボーハイダーから銃撃を受けましたが、ちょうどジャングルの中にいて自動車を走らせていました。敵機は超低空でバリバリと撃つて来ました。幸いに敵は一機だけだったので自動車には当たらず助かつたのです。私はトラックの上で警戒中でしたので、運が良かったわけでありす。

七月ころになると、本来の任務もなくなり、第三分廠の我々百人ばかりはバンコックの第十九野戦航空修理本廠に派遣されました。これは歩兵としてインパール作戦撤退部隊の補充要員となるためでした。飛行師団長が、我々の出発見送りと訓示をするため本廠に見えてきました。しかし、その日が八月十五日だったので、見送り激励の訓示が、日本無条件降伏の訓示となっていました。

終戦後俘虜生活のとき、私は英軍検査官の当番兵として勤務した後、帰国のため、バンコック港から乗船したのは、たしか昭和二十一年六月七、八日ころだったと思います。船は米軍のリバティー型輸送船で、神奈川県の浦賀港（浦賀港停泊船にはコレラ患者発生し、長いこと停泊を命ぜられた船も多い）へ上陸したのが、六月二十七日で、今から四十七年前のことです。宿舎に二泊して家に帰ったのですが、岐阜市は焼野が原で母が四畳半ほどのバラックを建てて住んでいました。この四畳半の小屋で、母、妹、弟と私の四人で、昭和二十二年六月まで一年間暮らしました。一年後、

私の誕生日（九月三日）の思い出として、借金をしながら昭和二十二年に新築しました。当時の金で、たしか四万五千円で建てたと記憶しています。仕事の休日には、ブローカーなどをやって資金を作りました。私にとっては復員してからの人生の始まりでした。

全盲の母は健在でしたが、岐阜空襲で逃げるとき、線路で転んで骨折しました。一緒に逃げていた人が、線路脇の防空壕へ入れてくれたのですが、水浸しの壕だったので、骨折したまま朝まで水の中にいたわけでした。後で市民病院に担ぎ込まれたがもう手遅れで、医者も負傷者が多いので余り治療はしてもらえなかったといえます。その上、家は岐阜空襲で全焼してしまっていました。

私は戦時中盲腸炎になったのですが、戦地では手術ができず、そのままにいました。昭和二十五年、盲腸炎が再発し手術をしました。母は全盲、足は骨折、病後の後遺症で左手不自由でした。

家を建てたので、昭和二十三年二月結婚して、不由な母を嫁に面倒をみてもらいながら私は勤めに出る

ことができました。前に申したとおり母の全盲の原因は、農家で栄養失調、父は自転車に乗って走っていた学生の傘の先が目に入り失明しました。

その母は、脳溢血の後遺症のため、昭和三十五年十一月に亡くなりました。その間、長女は昭和二十四年に、長男は同二十六年、次男は同三十年に誕生、現在、私たちも、子供たちも皆健在であり幸せだったと思います。

軍隊の思い出は、盲目の父母のもとで育った私ですが、中隊一の射撃の名手といわれたことであります。また、目の不自由な親と弟妹を残して、死ぬか生きるかの戦地の生活の中、マラリア、デング熱、アミーバ、赤痢に最後まで悩まされながら生き帰ったことでもあります。

また、隊では古年兵の下で、しかも終戦時まで、補充要員は来ず、文字通り最後まで万年初年兵の軍隊生活をしたことです。野戦の軍隊経験者でなければ味わえぬ大きな苦勞であります、この「何くそ」の精神力が生き返り、戦後再出発の原動力になったことも事

実であります。

【解 説】

―ビルマ野戦航空分廠 苦難の家族を想う

聴取証言者・沢田氏の写真作業は、主として航空機の戦闘後の機体等の弾痕、翼の状況などを細かく撮影するのが任務という極めて特殊な技術者でもあった（被写体は主として飛行本体）。

軍隊と写真、戦闘と写真は近代戦に不可欠のものである。しからば、作戦要務令の中のどのような章にこれが記載されているか。

作戦要務令総則の第一（準拠事項）

「本令ハ陣中勤務及諸兵連合ノ戦闘ニ関シ一般ニ準拠スベキ事項ヲ示スモノトス。」と記されている。

いやしくも陸軍軍人たる者はその階級・職務にかかわらず、作戦要務令につき教育を受けていた。

作戦要務令第一部、第三編 情報。

第一章、搜索。第一節 飛行部隊、気球部隊、

第九十 飛行機ヲ以テスル搜索ハ視察又ハ写真ニ依

リ或ハ之ヲ併用ス其ノ何レニ依ルベキヤハ主トシテ搜索ノ目的、敵情、氣象、搜索結果利用ノ時期等ヲ考慮シテ之ヲ定ルモノトス

第九十二(空中写真) 空中写真ハ詳細正確ナル情報ヲ得ルノミナラズ之ヲ地図ニ代用シ或ハ之ニ依リ地図ヲ作製スル等重要ナル価値ヲ有ス然レドモ広汎ナル地域ニ互リ写真撮影ヲ実施スルハ通常困難ナルヲ以テ写真搜索ノ地域ハ作戰上重要ナル部分ニ制限スルヲ要ス

写真搜索ヲ命ズルニ方リテハ搜索目的、撮影地域若シクハ目標、提出時期及部数要スレバ写真ノ種類、梯尺等ヲ明示スルモノトス。写真搜索ヲ実施セル部隊ハ写真ノ完成ニ先ダチ主要事項ヲ報告スルコト緊要ナリ。広範囲ニ互ル写真搜索ハ通常軍司令官之ヲ統一シテ実施スルモノトス。

第九十三(斜写真) 写真搜索ニ方リテハ其ノ目的ニ応ジ斜写真又ハ所要ノ梯尺ヲ以テ垂直写真ヲ撮影ス。(垂直写真)。垂直写真ハ地図の価値ヲ有シ斜写真ハ目的及地形特ニ其ノ高低起伏ノ觀察ニ便ナリ而シテ同一目標又ハ地域ヲ時日ヲ隔テテ前後數回撮影シ此等ヲ比

較研究スルハ状況ノ変化、敵ノ企図等ヲ判断スル為重要ナル価値ヲ有スルモノトス何レノ場合ニ於イテモ空中写真ハ之ヲ雙眼写真トシテ利用スルヲ有利トス

軍隊の作戰要務令に記されている写真は前述のごとく、戰術的、更には戰略的に搜索の正確性、裏付けとし空中写真(地図としても)重視されているが、沢田氏の場合は被写体が航空機そのものであり、その性能、航空工學上、戰闘機能、航空機作製については重要な基礎資料となり、航空分廠としてはその修理に必要な資料として写真が使用されていたのである。